

---

# レジェンド・コロシウム

アマゾン滝沼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レジェンド・コロシウム

### 【Nコード】

N4001M

### 【作者名】

アマゾン滝沼

### 【あらすじ】

流行りのアーケードゲーム、「レジェンド・コロシウム（レジ・コロ）」。それは“仮想空間で超能力を体感！！”という謳い文句が売りの、念天道社秘蔵のゲーム。

各社の度肝どころか世界の目を飛び出させた超技術の結晶。

そんなハイテクゲームをまさかの『教材採用』した奇抜すぎる学校。

「ふざけているのか!?!」「いや、新しい」と世間を二分するこの学校の未来は!?!?

……それにしてもこのゲーム。本当にただのゲームなのであるのか。

s e a n 1 通学（前書き）

……じぞー！

sean1 通学

レジェンド・コロシウム

Sean1 通学

Am8時10分。

早朝ラッシュの時間帯、行き先へと急ぐ人間の一人が僕。そう、不本意ながら自転車にまたがって、踏み切りで留まっている僕がいる。

本当は電車で通学する予定だった。だが何の間違いか今もって理解しがたいが、僕は白色の制服を着ていて、自転車のフレーム上で「世流場式亞」のステッカーを恥ずかしくも輝かせている。

「世流場式亞」は当て字で、「セルバニア」と読む。何にせよ、公立高校の名前だとは思えない。この現実が幻想であることを信じたいが、あいにく現実主義者を気取っているのでそれも不可能だ。

……それにしても長い踏み切りだ。もう、5分近くは待っているのに。

別に遅刻の心配は無い。余裕を持って家を出てきているので、万が一の不足が起きない限り間に合う。だが、待たされる事が好きな人間などそう居るまい。僕もその例に漏れない多数派なので、現在、少なからずストレスを感じている。

非常に不愉快で無価値なこの時間。苛立つ気持ちをさらに苛立たせる踏切の警戒音。そして遮断機の根元付近でそれに寄り掛かって

いる女性。死にたいのか？何のためにその黄色と黒の棒が存在しているのか理解できないのか？

馬鹿なのか軽率なのか知らないが、そういった物の意味を侮辱するような行為は気に喰わない。さらに制服を見る限り、「セルバニア」の生徒らしいので余計に気に喰わない。学校の程度がこれで知れる。噂どおり、「色物」高校だということか。

そして、そんな色物高校に通う事になった自分自身は何物にも増して気に喰わない。

遮断機に寄り掛かっている女性は覗き込むようにして、遠くに見える電車を眺めている。金色の長髪が目立つ。それが偽りや紛いの類ではない事を即座に理解させてくれるほど、それは滑らかで綺麗だ。

しだいに近づいてくる電車を見ても女性は身を引かない。セルバニアには留学生も多いと聞くので、こいつもその一人なのだろう。尻を突き出してだらしく寄り掛かって……羞恥感覚の差異を感じさせてくれる。

留学生はその質で学校の程度がより顕著に計れてしまう指標ともなりえるので、入れれば良いというものではない。こんな常識知らずが在学していた場合、それが学校の評価向上に繋がるとは思えない。

だが、金髪に白い学生服は見栄えがよいことはいいので、宣伝効果があることは認めておこう（別に外人「色髪とは限らないが」。どの道、そんな評価は実の無い幻想。

「所詮は見栄か……」

思わず口を吐く言葉は踏み切りの音に紛れて消えた。自分が惨めで仕方ない。

電車が近づいてくる。線路と車輪の擦れる金属音もしだいに近くなってきた。セルバニアの女学生は相も変わらず、線路に身を乗り出したままだ。しかし、別に当たる距離だとは思わないが、それでも危険な事に変わりはない。スリルを楽しんでいるのか？

いよいよ騒音は僕の聴覚を支配し、鉄の塊が僕の眼前に差し掛かる……………

『ボヒッ！！』

停止する僕の一瞬。絡まる思考。それらを無視して走り抜ける、金属摩擦の巨大騒音。

信じられるだろうか？けたたましい踏み切りの警戒音と、電車が通り過ぎる際の激しい起動音。それらの轟音を突き抜けて鼓膜に響いてきた下劣な放出音。

現実が受け止められない。豪快な「放屁」の音は疑いようもない程に立派なもので、確かに僕の鼓膜を貫通した。電車が通過する轟音を非常識にも上回った事が、その事実を一層確実なものとして僕の脳に確信させる。

「あ……………」

セルバニアの女学生は僕の方を少し驚いた様子で振り向いた。目が合ってしまった。気まずい。

“こいた本人”も、あの音の大きさなら聞かれたことを理解しているはずだ。今見せている反応から考慮すればその予想は当たっていると思われる。

僕にできる事は「聞かなかったことにする」しかない。視線を逸

らして空を見つめてみたが、アドリブに弱い僕の態度は明らかに不自然な事だろう。その点については申し訳ないと心の中で謝意を表しておく。

中々上がらない遮断機と何とも言えない空気に惑わされて、僕はもう一度彼女を見た。

別にその気は無かったのだが、再び目が合ってしまった。

気まずさに耐え切れず視線を逸らそうとした僕の目に映った彼女は明るい表情でこう言った。

「あはっ、オナラこいちゃった」

それは僕の想像力を跳ね馬のごとく飛び越えた反応だった。

白く、清潔そうな歯を覗かせながら、彼女は楽しそうに笑顔を浮かべている。

完全に虚を衝かれた僕はせり上がっていく遮断機にも気づかず、呆然と彼女の後姿を見送った。



sean1 通学（後書き）

かなりぶつ切りに進みます。

「台本」のような感じですが、それはそれとしてなんちゃら……。

ともかく、読んでいただき、誠にありがとうございます！！！！！！

!!!!!!!!!!!!

s e a n 2 入学式（前書き）

……どうぞ！

## Sean 2 入学式

### Sean 2 入学式

初登校の日は入学式。新入生は体育館に集まり、教師連中も一同に介している、らしい。

それにしても何だコレは。生徒の身なりがまったく揃っていない！大半は制服を着てはいるが、その着こなしはメチャクチャ。中には明らかに改造しているものもある。制服自体を着ていない者も目立つ。ここは制服指定だったはずなのに……。

「次は本校の学長、色部正嗣しきべ まさつぐが新入生の皆さんにこれからの学校生活についてのアドバイスをを行います」

アナウンスまで酷い。これが「式」か？心配と不安が絶え間無く湧き出てくる。

学長が壇上に上った時、体育館は俄かに落ち着きを失くした。

「皆さん、お早うございます。そして始めまして。私がご紹介に預かりました、色部です」

「！？」

これが……学長？

「皆さん、驚かれた事でしょう。フフフ、無理ありません。なにせ玄関正面に“巨大な彫像”があるのですから」

彫像？ああ、そっぴやあつたな いや、そんなことより……。

「この学校の入り口にあるあの巨像は、この学校の設立を政府に提案し、そして設立を決定させた、言わばこの学校の創設者にあたる故・神波モナカかんなみ氏の功績をたたえて建設されたものなのです！」

そんなプチ情報なんかより6億倍気になることがある。この学長

若い、若すぎる！

見た目はどうひいき目に見ても「今年成人」。同い年と言われて

も疑問は無い。

学長に対する生徒たちの反応はまちまち。しかし、大半は既に知っていたのだが改めて現物を見て、「ホントに若けえっ！」と驚いているようだ。

僕はこんな学校に入る気も無く、入った事を享受しきれずにいたのでパンフレットも見えていない。だから、その驚きは他の生徒より一塩。

「さて、本日から晴れて本校の生徒となった皆さん。あなたたちのなんと幸運なこと！これであなた方は、当セルバニア学園の優秀な設備と自由度の高い校風を満喫し、充実の3年間を過ごすこと！そして、人間として幾分ものステップアップを遂げることを約束されたも同然なのです！！」

いや うん。なんだか通販みたいな口ぶりだな……なんて思っていたが、彼は販売員には向いていないようだ。

その後、色部学長は“2時間”かけてじっくりとこの学校の素晴らしさを僕らに語ってくれた。おかげで、彼はさっそく僕の「ウザイリスト」No.1になりました。

公立セルバニア高校は今年度で創立15周年を迎えた。

千葉県流山市、都会から微妙な距離感を残すこの地に佇むこの校舎は、学校とは思えない出で立ちをしている。

“ビルディング”……この言葉が勇ましく似合う校舎は日の光で銀色に輝き、夜間の電光によって青銀色に輝く（実際にこれを見たことは無い）。10の階に分かれ、尚且つ広い敷地の上に立つ全容は「巨大」の一言。自由な校風と独自のシステムで他校と一線を隔している。しかし、何せ授業に最新式ゲームを取り入れるような校風なのでこの学校の存在については賛否両論（主に非）が飛び交っている。

さて、そんな不真面目で遊び半分な学校についた僕を出迎えてくれるのは巨大な門。そこをくぐると「五斜線道路」並に広い校内通学路が眼前に広がる。これを始めて見た感想はこうだ

「玄関、遠い……」

200m程の校内通学路をひたすら直進すると、ようやく自転車置き場に辿り着く。これがまた極普通の、ボロボロな自転車置き場なので腹が立つ。いくら表面をゴージャスに繕っても、こういった普段日陰となる部分に気を回していない時点でこの施設は“くだらない”のだなとあらためて実感できた。

正面玄関はもはや玄関というより高級ホテルのロビーなのだが、その前に待ち受ける謎の銅像（全長3m）があまりにも無意味すぎて、残りのやる気を全て奪ってくれた。　　そういえば学長がこの銅像について語っていたな。まあ、何一つ興味はないが。

こうしてみると金持ちのお坊ちやま専用甘やかし施設のように思えるが、実際にこの高校に通う生徒は決して金持ちばかりではない。僕自身、安定性に定評のある一般公務員の子である。

この高校、入学の仕方が非常に変わっている。

『　一芸入試のみ　』

この学校に一般試験は存在しない。いや、一般試験が“一芸入試”なのである。もちろん英語や数学で勝負したい人はその試験も受けられるが、あくまでそれも“一芸”。有名な話に、とある不良学生が「腹で根性焼き二十本（タバコの火を腹で消す）」を成し遂げ、入学と同時に厳重注意をくらったという話がある（幾ら自由でも最低限の節度はあるようだ）。

授業内容はフリーダム。通常科目もあるが、何やらお遊びとしか

思えない授業も多々あるらしい……。

僕の教室は一ノ三。つまり3組。教室は大型ショッピングモールのような校内の四階に位置している。それにしても、いちいち広い疲れる。

入学式が終わり、ようやく開放されて時刻は正午、12:00。今日はここで教師から簡単な説明を受けた後、解散して終了らしい。入学式だし、初日だし。あまりだらだらやられても困る。丁度良い。

廊下の張り紙からすると、僕の席は一番後ろ。やった、好きだ。

席に着いて周囲を見渡す。

教室自体は至って普通で、黒板もあれば簡単なロッカーもある。机や椅子も、どれほど奇抜なのか……と期待していたのだが、これも普通。ことごとく半端な学園だ、と僕は目を細めた。

「なんか騒がしくねえ？」

「え!？」

突然の言葉に2秒ほどそれを放置してしまったが、どうやらこれは僕に向けられたセリフらしい。とりあえず無難に合わせることにする。

「そ、そうだね。初日なのに結構、賑やかだね」

「つか、ナニ？ 割と顔見知り同士って多い？ ここって中学あったっけ？」

「いや、どうだろ……」

申し訳ないが、僕は絶望していたのでこの学校についてはほぼ無知識。明確に回答できない。

「にしても、アイツとかうるせえ感じな。いかにも“アメリカ”って顔してっし」

「あ、はは……」

いきなり話しかけてきた隣の人はそう言って窓際最前列の男を指差した。たしかに、彼は日本人ではなさそうだ。留学生だろうか。背が高く、鼻も高く、そして顎<sup>あご</sup>が長い彼は見た目と違って日本語がぺらぺらだ。

「なあ、ガイジンは英語をしゃべれって思わね？」

「う、うん？ どうだろ」

僕はこのご時勢だし、別に日本人が英語を話しても外国人が日本語を話しても一向に構いはしない。ただ、あまり騒がしいのは好かない。隣の人もきつと、そこにイラだっているのだろう。

ただ、この隣の人

短い髪は赤茶色で、瞳は快晴の空に近いブルー。

腕にはこだわりのありそうな時計と、銀のアクセサリー。

肌の色は透き通るように白く、腕は細い。

赤色のニーソックスとの狭間から見える太腿が、僕の鼓動を速める。

「お前、割と話やすいのな。私はサリー。よろしく、な！」

見た目、明らかに日本人ではない少女。

彼女の自己紹介に、緊張と迷いが交錯した僕は半笑いのまま。「よ、よろしく……」と半端に応じていた。

s e a n 2 入学式（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。御座います。に候。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4001m/>

---

レジェンド・コロシウム

2010年10月11日15時33分発行